

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「メロウ、ビビッドガーデンと移動型の八百屋“食べチョクカー”開始」
- 2) 「国産メンマが森を救う?“伐採して食べる”一石二鳥のアイデア」
- 3) 「極地建築家と開発、ヒマラヤでも被災地でも使える組立式ダンボールテント」

1) 「メロウ、ビビッドガーデンと移動型の八百屋“食べチョクカー”開始」

Mellow（メロウ）は9月10日、企業の移動販売事業を支援するサービス「店舗型モビリティ導入プラン」を開始した。第1弾として、産直通販サイト「食べチョク」を運営するビビッドガーデンと連携し、移動型の八百屋「食べチョクカー」を10月から始める。

「食べチョクカー」は、生産者から直接仕入れた野菜などのこだわり食材をマンションの敷地内で販売する。営業は都内2～3カ所のマンションなどで10月から3カ月間の期間限定で行う。販売場所は順次拡大していく予定。サービス開始に先立ち、運営メンバーの募集も開始した。

オンラインとオフラインの連動も実施。利用者は食材を購入した場合、同時に受け取るQRコードで後日、同じ生産者から「食べチョク」で買い物ができる。また、生産者から直接仕入れたおすすめの食べ方やこだわり情報を受け取れる。

「食べチョクカー」は、1個単位から商品の購入が可能。そのため、メロウとビビッドガーデンでは、実際に商品を見て少量から試して、納得してから、「食べチョク」で購入することで、これまでインターネットで購入することに抵抗があった人でも、ネットで買い物をする体験の機会が得られるとしている。

また、マンションや公園・商業施設などといった生活の場所の近くで、こだわり食材を直接見て買う体験や、遠出せず混雑がない場所で買い物ができる利便性、スーパーなどの既存流通では見かけない専門店や高級飲食店などに卸される生産者のこだわり食材を提供できるという。

「食べチョクカー」で利用するメロウの「企業向けモビリティ導入プラン」は、移動販売事業に必要なハード、ソフトをワンパッケージで提供するプラン。サービスには企業に最適な店舗型車両のリース、オフィス街やマンション、商業施設、公園といった出店ロケーション調整などが含まれる。

メロウは、モビリティを活用した空地活用事業やフードトラック関連サービスなどを手がけるベンチャー企業。今回の取り組みを通じて「店舗型モビリティ導入プラン」の利用拡大を狙う。

一方、ビビッドガーデンでは、「食べチョク」の利用者の約48.3%を占める一都三県（東京・神奈川・千葉・埼玉）に在住するユーザーの「高品質な食材が身近で購入できない」「自宅からスーパーまで遠い」といった買い物の課題解決を図るとともに、生活に入り込んだ場所で産直食材に触れる機会を提供することで、生産者のファン作りにつなげるとしている。

（2021/09/10 流通ニュース）

ネットでの買い物がますます普及していく中、やはり食品に関しては少し抵抗がある方もいるのではないだろうか。こういう場を設けることで生産者と消費者を繋ぎ、ネットで買うときにも安心感が得られるだろう。また都心でも集合住宅地などは高齢者が多く、一人

での買い物が不安だという声も多い。移動販売車がより広まり、これからの新しい店舗の形になってほしい。

2) 「国産メンマが森を救う? “伐採して食べる” —石二鳥のアイディア」

近年、竹の需要の低下や地方の高齢化などに伴い、管理の行き届かない荒れた竹林が全国的に問題となっている。そうした問題の解決に一役買うと期待されているのが、とある国産メンマだ。

千葉県中央部に位置する長柄町。道路に面した竹林に分け入っていくと、足元には多くの枯れた竹が散乱し、人が通るのもやっとなほど荒れている。かろうじて竹が竹を支えている状態で、生い茂った竹に覆われて辺りは薄暗い。管理された竹林と比べると、明らかに竹が密集し、薄暗くなっているのがわかる。

日本では昔から、家屋や日用品など多くのものに竹が利用されてきたが、プラスチックなどに置き換わり竹の需要が減少。また、管理する人の高齢化なども要因と考えられる。竹は成長のスピードが速く、増殖するため、竹林面積は年々増加しているが、管理が追いつかない竹林が増えると様々な弊害があるという。

竹林整備を行う一般社団法人「もりびと」千葉美賀子さん曰く、竹が生い茂って光が入らなくなると、森の中の小さい木なんかは育たなくなり、枯れてしまう。森が、竹に潰されていってしまう。さらに、他の弊害もある。大雨や台風の時には、倒れた竹が流れ出て水をさえぎり、氾濫や浸水などの二次災害を招いているというのだ。

そんな中、千葉さんは、170年以上続く地元の老舗「小川屋味噌店」（千葉県東金市）とタッグを組んでのメンマ作りに乗り出した。竹林整備を進めるために、大きさが“タケノコ以上、竹未滿”の「幼竹（ようちく）」を伐採すると同時に、食べて消費してしまおうという一石二鳥のアイディアだ。

通常メンマとは違い、茹ですずに繰り返し蒸すことで、柔らかさを出すことに成功。さらに、味噌を製造する際に出る「たまり液」を使って甘めに仕上げ、「メンマと言えばラーメン」のイメージを払拭し、様々な料理に使えるよう工夫したという。去年は販売開始2ヶ月たらずで完売。今年は竹の納品を3倍以上に増やしたというが、その一方で課題もある。

幼竹の重さは大体5、6kgもある。斜面だと、伐採してから下ろすのも2-3本が精一杯な上、使える部分は3分の1にもならない。竹林整備には本当に費用がかかる。国や地方自治体も補助金を出すなど竹林整備を支援しているが、まずは多くの人に竹の抱える問題を知ってもらうことが大切だと、千葉さんは話す。環境問題のはじめの取っかかりとしても、みんなで考えられるきっかけになるんじゃないか。

「箸・はし」「箆・かご」「櫛・くし」など、竹冠のつく漢字を思い浮かべると、日本の生活にどれだけ多くの竹が用いられていたのか想像に難くないだろう。今回取材した千葉さんも「日本人の暮らしの中にいっぱい入っていた竹が、どうして厄介者になってしまったのだろう」と語っていた。

近年、プラスチックの台頭によって竹需要は低下の一途をたどっているが、時代の移り変わりとともに用途を変えても、竹が持つ可能性に光を当て、貴重な資源として使っていく、こうした取り組みこそ、真の「持続可能性」と言えるのではないだろうか。

(2021/09/09 FNNプライムオンライン)

食べて解決！と聞けばシンプルな話だが、それをするためにとてつもない苦勞がかかっていては継続が難しくなってくる。せっかくの取り組みを無駄にしないためにも多くのサポートが必要だろう。その状況を知らせるためにはやはり小売業の存在が重要になってくる。商品の背景を伝えるのはもちろん、メンマという食べ方が特定されがちな食品をどうアレンジするかなど、腕の見せどころではないか。同時に、プラスチックが追いやられはじめている現状の中、竹製品が見直され放置竹林の問題の解決につながってくれば嬉しい。

3) 「極地建築家と開発、ヒマラヤでも被災地でも使える組立式ダンボールテント」

缶やレトルトパウチなど容器の製造技術に強みを持つ東洋製罐グループは8月、今秋からダンボール製の組立式テント「DAN DAN DOME」の提供を開始すると発表した。社会課題に向き合うプロジェクトの一環で、同社グループの日本トーカーパッケージと極地建築家の村上祐資氏（FIELD assistant代表）が共同で約半年かけて開発した。

高さ約3メートル、幅・奥行は3.6メートルのドーム状で、被災地や観光地、イベント会場などでの使用が想定されている。ネジやボルトが不要で子どもの力でも組立ができ、捨てる際の分別もしやすい仕様だ。

開発パートナーとなった村上氏は「DAN DAN DOME」の設計とデザインを担当した。「極地建築家」という肩書のとおり、南極や北極、エベレストなどに通算1000日以上滞り経験がある。この10年はプラスチックダンボール製の組立テントの設計に携わり、2015年のネパール地震などで現地にテントを供給した実績もある。

「ダンボールは誰でも捨て方がわかっている身近な素材。捨てた後も再びダンボールに戻りますし、海外のインフラでも処理できて耐久性もあります」（村上氏）。

ドーム型のデザインで、最小限の資材でもゆったりした空間が生まれる点も特長だ。「幾何学的にはもっと合理的な設計ができるのですが、最も優先すべきは、被災地など不安を抱えた非日常の空間でも誰もが組立に貢献できること。プッシュ式のロック機構を用いることで、直感的に組立ができるのは日本トーカーパッケージの技術があってこそ。迷っても完成できるナビゲーションを重視しました」。

プッシュ式のロック機構によって、誰でも組み立てやすい。さらに4台のテントを四つ隣の状態で並べると、中央部に中庭のような空間ができる。これはドーム型ならではだ。

「真四角のテントにはない非効率の産物です。ある意味、無駄かもしれませんが。でもこの空間に集まることで、有機的なつながりが生まれます。たとえば避難所などでは一方通行の指示系統になりがちですが、新たに横のコミュニケーションが生まれるかもしれない。組み立てる楽しさもありつつ、壊して捨てられる素材なので従来の常識を取っ払うような自由な使い方をしてほしい。個人的には、標高5000メートルの極地、ヒマラヤのベースキャンプに立ててみせたいですね」。

（2021/09/08 アドタイ）

日本は自然災害が多く、その度に被災地での暮らし方が問題になっているように思う。特に不安を抱えたときに、簡易で簡素なつくりのものに囲まれることはそれ自体がストレスとなる得るかもしれない。不要と思われるときこそデザイン面で精神的にサポートできることはあるのではと感じた。